

Title	「記憶」と「歴史」：集合的記憶論における一つのトポス
Sub Title	"Gedächtnis" und "Geschichte". Zu einem Topos im theoretischen Diskurs über kollektives Gedächtnis
Author	安川, 晴基(Yasukawa, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.94, (2008. 6) ,p.282(85)- 299(68)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎没後25周年記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00940001-0299">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00940001-0299</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「記憶」と「歴史」

——集合的記憶論における一つのトポス——

安川 晴基

## 「記憶」と「歴史」という対概念

個人や集団が過去を選択的に構成し、表象し、占有する諸々の形式——「過去の利用」<sup>1</sup>の諸形式——に注目する「記憶」というコンセプトは、この数年来、歴史研究における一つの「主導概念」になったと言われる。<sup>2</sup> 歴史研究の新たなパースペクティヴを開拓する理論的モデルである「記憶」というコンセプトは、過去についての特権的な知としてみずからを位置づけてきた歴史学の自己了解に対して再考を促すものである。

「記憶」というコンセプトの要諦としては特に以下の二点が挙げられる。(1) 単数形の「歴史」に対する複数形の「記憶」。諸々の「大きな物語」の構想——普遍的で客観的な所与としての歴史、目的論的な進行のプロセスとしての歴史（啓蒙主義の進歩史観、観念論的歴史哲学、弁証法的唯物論）、あるいはナショナル・ヒストリーの構想——の背景には、過去の個々の事象を包括する普遍的な連関としての「歴史」という観念があった。歴史における認識主体の視座を捨象したこの「集合的単数」<sup>3</sup>としての「歴史」(die Geschichte) に対して、「記憶」というパラダイムの出現は、ときには互いに矛盾する複数形の歴史／物語 (Geschichten) の回帰と見なすことができる。さまざまな想起（および忘却）の集団のアイデンティティ（同一性の意識）と結び付いた「記憶」というコンセプトは、一枚岩的な集合的単数としての「歴史」を、差異性と多様性の次

元に向けて分散させる。

(2) 過去の客観的な再現に対して選択的な再構成のプロセスの強調。単数形の「歴史」が複数形の「記憶」に分散する場合、単一の過去の客観的な表象と見なされるものもまた、並立する複数のヴァージョンに分解する。構成主義の記憶理論では、過去はおのずと生成するのではなく、言説実践とメディアによる表象によって社会的に構築されたものと見なされる。いかなる過去のヴァージョンが選択されるかは、想起の行為が遂行されるそのつどの現在のパースペクティブに依存している。この観点に立つなら、歴史記述が過去の事実を客観的に再現するという素朴実在論の理想は疑問に付される。ポスト・モダンの歴史相対主義をすでに消化した「記憶」というコンセプトは、それゆえ、歴史的事実について唯一の「正しい」ナラティブを決定することの不可能性を前提としつつ、過去がいかにして表象されてゆくのか、そのプロセスと形式に注目する。

「記憶」のパラダイムの隆盛を受けて、「記憶」の次元を記述対象として取り込もうとする歴史学の立場がある。例えば、公的なコモラシオンの実践における過去のイメージの制作や近代の国民国家における記憶政策をテーマとする歴史研究（例えば *History and Memory* 誌の諸論考）、あるいは、首尾一貫したまとまりとしての歴史構築物を、個々人の思い出という主観性の領域によって突き崩し、歴史経験の多声性に注意を向けさせるオーラル・ヒストリーなどがそうである。

そもそも、過去の客観的な再現という意味での「歴史」と、想起の主体のアイデンティティに結び付いた「記憶」を対立概念として対照させることは、19世紀に大学で制度化された実証主義の歴史学と歴史主義のコンテクストに由来する。すでにニーチェが文化批判の立場から、歴史学がもたらす現在との連関を失った教養財の過剰を、生を萎縮させる脅威として警告し、忘却することもできる「記憶」を「歴史」に対置している。<sup>4</sup>このような「歴史」と「記憶」の二分法は、記憶の擁護者の側からも、歴史学の代弁者の側からも繰り返し持ち出されてきたトポスである。しかしながら、第二次世界大戦を経た現在のポスト・トラウマ的状况では、

「歴史」と「記憶」は再び互いに接近している。

比較的最近の諸論争は、両者の間に明確な線を引くことがもはや困難であることを示している。例えば、ホロコーストの歴史的な位置づけをめぐって交わされたドイツの「歴史家論争」が投げかけたのは、歴史記述の社会的役割が、過去の出来事を歴史化する、つまりは他の諸々の出来事の中の一つとして、何らかの普遍的な枠組み内で相対化する学問的営為にあるのか、あるいは、歴史記述もまた過去の特定の出来事を記念する、つまりは神聖化する想起の一形式であるのか、という問いだった。あるいは、1990年にソール・フリードランダーによって組織された、ホロコーストの表象をテーマとする研究会議の背景には、歴史における「真実」の性質をめぐるホワイトとギンズブルクの論争があった。<sup>5</sup>歴史の物語叙法によって再構成された過去が言説の内部で完結してしまうのか、あるいは、歴史記述の相対性を規制する客観性の基準が記述対象それ自体に求められるのか、という問いは、認識論の次元に留まるものではない。とりわけホロコーストの表象にまつわる論争が示しているように、歴史相対主義を規制するという倫理的要請を課されている特定の文脈では、歴史記述に求められるのは、歴史的事実の妥当性を批判的に検証することばかりでなく、過去を忘却に抗して記念し、道徳的な方向づけを与えるという想起の役割である。

「記憶」と「歴史」を対照させるトポスは、近年話題にされることの多い「集合的記憶」をめぐる理論的考察でも中心的な問題連関の一つをなしている。以下の論考では、このトポスを一本の補助線として、集合的記憶論における三つの重要なコンセプト——モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」、ピエール・ノラの「記憶の場」、そしてアライダ・アスマンとヤン・アスマンの「文化的記憶」——を時系列的に並べて扱いたい。「歴史」との関連性の中で「記憶」がそのつどどのように捉えられているのかを見ることで、これらのコンセプトの間の共通点や違いを探ることが目的である。

## モーリス・アルヴァックス「集合的記憶」

フランスの社会学者モーリス・アルヴァックスは、1920年代に「集合的記憶」(mémoire collective) の概念を提起した。ベルクソンやフロイトとは異なり、彼は、記憶を純粹に個人の心的な事象として説明するのではなく、集合的な現象と考えた。フランスの社会学史では、デュルケム学派の第二世代に位置づけられるアルヴァックスは、デュルケムから集合表象の理論を受け継ぎ、記憶に関する個人主義的・心理主義的な考えを退けて、記憶を間主観性の次元に向けて開いた。彼の中心的なテーマは、個人の想起の行為が常に「社会的枠組み」(cadres sociaux) によって条件づけられているというものだ。この「社会的枠組み」とは、第一に、個人を取り巻く環境、つまり個人が属している集団のことである。この概念はさらに敷衍されて、集団の成員が分かち合っている共通の知識を表している。アルヴァックスによれば、記憶は二重の意味で社会発生的である。つまり、(1) 記憶は集団によって生まれ、(2) 集団は記憶によって生まれる。

(1) 言語や習慣ばかりでなく、個人の記憶もまた、社会化のプロセスの中で初めて獲得される。きわめて私的な思い出さえも、個人が属するさまざまな集団の内部におけるコミュニケーションと相互行為に参加することで構築され、固定され、維持される。ある集団の成員が特定の現在において分かち合っている思考様式、解釈の図式、観念や価値の体系、象徴形式、集団の自己像といった準拠枠がなければ、個人は過去の出来事を時間と空間において位置づけ、物語の構造を与え、意味を付与し、想起することができない。個人の思い出は、この準拠枠を支えとすることで間主観的に確認され、伝達可能なものとなり、それゆえ集団によって共有されうるものになる。言い換えれば、集団によって共有されうる思い出しか、個人は持つことができない。「この意味で、集合的記憶や記憶の社会的枠組みというようなものが存在するのかもしれない。そしてわれわれ個人の思考は、どれほどこの準拠枠の中にとどまっており、

この記憶に参加しているかに応じて、想起することができるのだ」。<sup>6</sup>

どの個人も家族、職場、社会階層、宗教的共同体、国家といったさまざまな集団に同時に属しており、より包括的な集団の記憶を分かち合っている。アルヴァックスによれば、純粋に個人的な記憶は存在せず、また何らかの集合的意識や精神を担い手とするような超個人的な記憶も存在しない。個人の記憶と集合的記憶は相互に条件付け合っている。つまり、個人の記憶は集団の記憶に参画することで初めて可能となり、また集団の記憶は、個人の記憶の中で初めて具体化される。

(2) アルヴァックスの理論の要諦は、過去についての社会構成主義的と呼ぶことのできる視点にある。アルヴァックスによれば、いかなる集団においても、過去はありのままに想起されるのではない。過去から残されるのはただ、「社会がどの時代であっても、そのつどの準拠枠によって再構成することができるものだけだ」。<sup>7</sup> 記憶の「社会的枠組み」に適合するものだけが想起され、この準拠枠に適合しないものは忘れられる。この準拠枠によって、集団は過去を常に、集団のそのつどの自己イメージにかなう要請や価値や希望に暗黙のうちに適合させて形づくる。集合的記憶は、その担い手である集団が、自らを再確認できるような過去のイメージを示す。集団は、そのような過去についての知識を共有することで、自らの独自性と連続性と結束を維持する。

アルヴァックスの「集合的記憶」というコンセプトは、想起の行為が過去の能動的・選択的な再構成の作業であるとする構成主義の記憶理論を先取りしている。彼はみずからの提示した「集合的記憶」の独自性を際立たせるために、「記憶」と「歴史」を峻別している。両者を対置することで、集合的記憶と歴史記述の枠組みの中で再現される過去が異なる種類のものであることが強調される。

歴史的世界は、いわば、あらゆる部分的な歴史がそこに流れこむ大洋のようなものである。(中略) 歴史は人類の普遍的記憶として姿を現わしていると言える。しかし普遍的記憶というものは存在しな

い。すべての集合的記憶は空間においても時間においても有限な集団に支えられている。過去の出来事の全体を唯一つの場面に描くように蒐集することは、その思い出を保っている集団の記憶からそれらの出来事を切り離し、それらの出来事が、それが生じた社会的環境の心理的生活と結びついている絆を断ち切り、その年代的・空間的図式だけを保持することによってはじめて可能なのである。<sup>8</sup>

集団の特殊な歴史を保持する「集合的記憶」は、その担い手である集団に、すべての時代を貫いて自己を再認することができるような過去のイメージを提示する。それゆえに「集合的記憶」は、それが保持している集団の歴史における類似性と連続性を強調し、深刻な変化を覆い隠す。それに対して歴史学は、差異と不連続性を知覚する。一つの発展の系における変化を指し示すものだけが歴史的事実と見なされる。また、包括的な枠組みとしての「歴史」は、個々の「集合的記憶」に体现されている複数形の歴史を統合し、歴史記述の同質的なタブローの中で平均化する。各々の集団に結び付いた「集合的記憶」が常に複数形で存在しているのに対して、一つの普遍的な「歴史」しかない。その「歴史」は一つの全体像を提示する。その全体像の中では、過去の出来事は同一の次元にあり、「どんな事実も他の事実と同じく意味を持ち、同じように指摘され、記述されるに値する」。<sup>9</sup>

アルヴァックスがこのように「記憶」と「歴史」を対置するとき、彼の歴史についての理解は、20世紀初頭に支配的だった実証主義的な歴史学のそれに明らかに依拠している。ポスト・モダンの歴史相対主義とは異なり、歴史記述はアルヴァックスの場合、制度的に認可された公的な想起の一形式とは見なされない。むしろ歴史記述とは科学である。生きた担い手に結び付いた「集合的記憶」は、永遠の現在において更新される、不断に移ろいゆく連続的な流れである。それに対して、批判的距離を常に前提とする歴史記述は、現在と過去の断絶の意識から出発する。「歴史」は「伝統が終わる地点からしか、つまり社会的記憶が消失するか分解す

る時点からしか、始まらない」。<sup>10</sup> 歴史家の仕事は、記録された明証的史料に基づいて、党派的な記憶の物質的残滓から不純物を取り除き、一つのメタ・パースペクティブから過去についての客観的で普遍的な知識を提供することにある。このような「歴史」についての古い考え方、オーギュスト・コント流の実証主義的な歴史理解は、のちにアナール学派と呼ばれることになる歴史家たちが、同時代にまさに乗り越えようとしていたものだった。アルヴァックスのストラスブル時代の同僚だったマルク・ブロックやリュシアン・フェーブルは、歴史学の門戸を経済学、人文地理学、民族誌、社会心理学といった隣接する諸分野に向けて開放し、集合心性を対象とする新たな社会史を準備した。アナール学派による歴史学の革新と時期を同じくして、アルヴァックスは、集合表象の分析に関心を向けるデュルケム派の社会学者としての視点から、社会における過去の表象のあり方に注意を向けた。<sup>11</sup>

アルヴァックス自身は、「集合的記憶」と歴史学を、過去を再構成する対極的な枠組みとして切り離れたが、それにもかかわらず、彼の構成主義的な記憶理論は、ポスト・モダンの歴史研究における重要な問題を示唆している。つまり、過去がそのつどの現在の社会的枠組みによって再構成されるとすれば、それ自身がドキュメントという、イメージや言説によって固定されたコメモラシオンの物質的残滓に依拠している歴史学にとって、その過去の表象の背後に想定される「真の」現実へと至る通路は遮断されている。この場合、ドキュメントそれ自体をモニュメントとして読まなければならない。それゆえ、客観性という学問の理想に忠実であろうとする歴史家にとってより確実で安全な道は、何らかの真性の過去を再現することではなく、むしろその表象の分析を通じて、過去がかつて想像されたそのあり方を記述することである。このような「記憶の歴史」の試みの一つが、次に挙げる史学史的な歴史記述である。

### ピエール・ノラ「記憶の場」

第二次世界大戦後に久しく忘れられていたアルヴァックスの「集合

的記憶」のコンセプトは、ピエール・ノラのプロジェクト『記憶の場』（1984-92年）に受け継がれた。このプロジェクトのための網領的な論文「記憶と歴史のはざまに」<sup>12</sup>（1984年）の中で、ノラはアルヴァックスによる「記憶」と「歴史」の対置を引き継いでいる。

記憶と歴史——両者は決して同義語ではなく、今日われわれが意識しているように、どの観点から見ても対立している。（中略）記憶とは常にアクチュアルな現象、永遠の現在において体験される結び付きである。それに対して歴史は過去の再現である。（中略）記憶は思い出を聖なるものの領域に移し、歴史は思い出をその領域から追放する。歴史の仕事とは、脱魔術化することだ。記憶は集団から生まれ出て、その集団をつなぎ合わせる。（中略）それに対して歴史は皆のものであり、誰のものでもない。それゆえ歴史は普遍的なるものにならなっている（12-13頁）。

ノラの場合、「記憶」と「歴史」の二分法は、そのレトリカルなパトスゆえに、アルヴァックスを越えて、さらにニーチェの文化批判を彷彿とさせる。ノラはこの論文で、「記憶」が「歴史」へと不可逆的に変質してゆくことを繰り返し強調している。その際、彼は近代化と伝統の断絶というパラダイムに依拠している。ノラが「真正の、社会的な、ありのままの記憶」（12頁）と呼ぶものは、多分に、前近代的な社会の口承伝統を指している。伝統的な記憶社会から近代社会に移行するにつれて、過去と未来、経験の空間と期待の地平の間には溝がますます広がっていく。この発展の過程においては、かつて集団の記憶の中で現在のものとして保持されていた直接的な過去の経験は、決定的に失われる。ここで作用している力を、ノラは「歴史性という底流」（11頁）という言葉によって表現している。

この網領的論文では、アルヴァックスによる「記憶」と「歴史」の対置は徹底的に先鋭化され、両者は和解しがたいまでに背反した関係に置

かれる。それどころか、ノラはまさに「記憶」が「歴史」によって浸食されるということを強調することで、みずからを過去についての特権的な知としてきた近代の歴史学には忘却が内包されていることを指摘する。つまり「歴史」とは、ありのままの過去を映し出す鏡像ではなく、「変化の波にさらわれているために、忘却することを運命づけられたわれわれの社会が、過去から作り出したもの」(12頁)なのである。「歴史」は過去と現在の根本的な差異の意識から出発する。この「歴史に捕らえられた記憶」(18頁)が提示する過去の痕跡は、本来的な「記憶」という直接性の経験とは決定的に断絶している。この論文におけるノラの最も先鋭な主張は、歴史学という制度の存在自体がすでに「記憶」の死を意味しているというものだ。<sup>13</sup>近代の歴史学の根底には「自発的な記憶を破壊する批判」が作動している、とノラは考える。「歴史の真の使命は、記憶を破壊して抑圧することにある」(13頁)。しかしノラは、このような「記憶」と「歴史」の背反的な関係を出発点としながらも、歴史学に向けられた再帰的な反省の視線を通じて、再び「記憶」に近づくための方途を探る。<sup>14</sup>それが「記憶の場」という構想である。この別様の歴史の構想は、もはや失われた過去の直接的な現実を再現することを目指すのではなく、「記憶」の痕跡を拾い上げることで、現在の中にある過去のイメージを記述することを試みる。

「記憶の場」(lieu de mémoire)というコンセプトは、古代の記憶術の「場」(loci)の概念から借用されている。この「記憶の場」には、過去の諸々のイメージが凝縮され、象徴的に体現されており、集団はこれらの象徴を介して自らの政治的アイデンティティを想像する。『記憶の場』というプロジェクトの新しさは、従来の歴史学の史料範囲を越えて、記念碑や象徴の次元をも歴史記述の対象として取り込んだことにある。このプロジェクトは、フランスの伝統的表象を形づくってきたシンボル体系の一種のトポグラフィーを作成する試みであり、集合的記憶が結晶化している「場」の分析を通じて、フランスの国民意識の諸層を明らかにしようとするものである。

国民の記憶の諸層を探查する際に、ノラおよびこのプロジェクトの参加者たちは、実証的な知に向かって漸増的に進歩するというコント流の歴史学のモデルを逆転させる。『記憶の場』の叙述戦略は、まさにフーコー的な意味での系譜学のように、現在から過去へと遡っていく。第一部「共和国」では、19世紀後半の第三共和政時代に生まれた諸々の自己表象が、そして第二部「国民」では、近代初期において国民の表象がそこから形成されてきた記憶の環境が、さらに第三部「さまざまなフランス」(Les Frances と複数形で表記されている)では、中世フランスの伝統的な社会における、よりいっそう広範な集合的記憶が扱われる。このように過去へと遡及するプロセスにおいては、当然ながら革命の伝統もまた、考古学的調査によって発掘される国民の記憶の諸層における一断面にすぎないものとなる。こうして、国民の政治的アイデンティティの参照項を、さまざまな時代のさまざまなコンテキストに由来する「記憶の場」に再び分散させることで、革命神話と共和主義イデオロギーに依拠するフランスのナショナル・ヒストリーが提示してきた一つの統合的な国民像を解体し、シンボリックな現実として存在しているフランス像を、多元的に叙述することが意図されている。

国民の政治的アイデンティティの表象のあり方を探るこの想起の社会史は、それゆえ、伝統的なナショナル・ヒストリーに回帰するものではない。この新たな歴史記述の試みは、歴史的物事が形成されるプロセス、つまり、過去の象徴化と神話化のプロセスに着目する一種の史学史的な方法である。記述の関心的にあるのは過去の事件それ自体ではなく、むしろ、集合的記憶の中でその事件のイメージがどのように形成され、変容してきたのかである。「英語版序文」の言葉を借りるなら、この新たなナショナル・ヒストリーの試みは、「再生でもなければ復元でもなく、再建でもなければ表象ですらない。それは、言葉の能うかぎりの意味での『再記憶化』である。つまり、過去の想起としての記憶ではなく、現在の中にある過去の総体的構造としての記憶に関心をよせる歴史学なのである。第二段階の歴史とってよいだろう」。<sup>15</sup>

ここで付言するなら、このような史学史的方法による新たな歴史記述を標榜する『記憶の場』の構想は、アナル学派の第三世代に数えられるジャック・ル・ゴフが提起した歴史心性の歴史の構想に近い。ル・ゴフもまた「歴史」と「記憶」を区別している。彼によれば、学問的言説としての歴史学は、みずからが社会・政治的なコンテクストに依存していることを自覚しつつも、歴史的「真実」についての確信に基づき、客観性を追求しなければならない。歴史学の役割は、口承によるものであれ、書かれたものであれ、いっそう時代に制約されている「記憶」によって初めて近づきうるものとなる歴史の「原材料」を、知の対象に変えることにある。<sup>16</sup>つまり歴史学はこの場合、諸々の記憶（それには公的なコモラシオンの形式としての歴史研究も含まれる）を批判的に吟味して中立的にアーカイヴ化する、いわばセカンド・オーダーの歴史として位置づけられている。

### アライダ・アスマンとヤン・アスマン「文化的記憶」

冒頭でも言及したように、特定の集団の関心によって導かれた過去の選択的占有としての「記憶」に、価値中立的な事実確認あるいは過去の客観的な再構成という意味での「歴史」を対置するトポスは、学問的客観性という理想を掲げる批判的・実証主義的な歴史学のコンテクストに由来する。ノラやル・ゴフの言辞がよく示しているように、ポスト・モダンの歴史研究において、過去の表象の諸形式に史学史的な再帰的なまなざしが向けられるのは、多分に、みずからの歴史記述の作業もまた公的なコモラシオンの実践の一つであると見なされることのないように、過去の表象の枠組みを脱構築することを担保として、客観性に対する権利を要求するためである。その意味で『記憶の場』のプロジェクトは、およそ歴史学の領域で動いていると言える。ノラがその綱領的論文で「記憶」と「歴史」を徹底的に背反した関係に置くとき、このこともまた、みずからの新たな歴史学の試みの革新性を際立たせるための、レトリカルな対照にすぎないのではないかという疑いを払拭できない。

「記憶が出来事を反映し、歴史が記憶を反映する」という「伝統的な理解」<sup>17</sup>に対して、例えばイギリスの文化史家ピーター・バークは異を唱えている。バークによれば、客観性と批判的距離という諸価値に基づく歴史記述それ自体が社会的な構築物であり、社会・文化的に規制された意識的・無意識的な選別、解釈あるいは歪曲のメカニズムが、歴史記述の場合にも作動している。それゆえバークは「歴史」と「記憶」を対置するのではなく、歴史記述もまた集合的想起の一形式として考えるように提案する（『社会的記憶としての歴史』）。この場合の「社会的記憶」とは、過去と関係を取り結ぶためのさまざまな様態を包括する上位概念である。歴史記述もまた、ある社会がみずからの過去を記述するための一形式であり、その限りで、アイデンティティとのつながりという記憶の決定的な契機を含んでいる。

ドイツの文化学者アライダ・アスマンとヤン・アスマンが提唱した「文化的記憶」というコンセプトもまた、「想起の概念を中心として文化の学の新しいパラダイムを構築する」<sup>18</sup>という要請に応えるための理論的モデルである。集団による想起、伝統の形成（文化の連続性の構築）、政治的アイデンティティの確立の連関に照明を当てる「文化的記憶」というコンセプトは、「記憶」を文化の存立を可能にする基本的な要件として理解する。この観点に立てば、宗教、神話、芸術、文学などと並び、歴史学もまた、社会がみずからの過去と関係を取り結ぶ諸々の象徴形式の一つとして、包括的な想起の文化の一領域に位置づけられる。以下ではアスマン夫妻の「文化的記憶」のコンセプトについて概観したい。

### 「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」

アスマン夫妻は、アルヴァックスの記憶理論を受け継いで発展させ、「集合的記憶」を「コミュニケーション的記憶」（kommunikatives Gedächtnis）と「文化的記憶」（kulturelles Gedächtnis）という、二つの異なる様態に概念的に区別した。前者は、個人の有機的な記憶を基盤とし、具体的な生活連関におけるコミュニケーションと相互行為を通じて自然

発生的に形成される。個人がその人生の枠組みの中で同時代人と共有している最近の過去についての経験を保持する「コミュニケーション的記憶」は可変的であり、その担い手が交代すれば、その内容もまた移ろう。「コミュニケーション的記憶」とは異なり、「文化的記憶」はおのずから生成するのではなく、外在化された蓄積メディアと文化的実践を通じて構築される。前者が、前進する現在とともに移ろいゆく、想起の共同体の「短期記憶」であるのに対して、「文化的記憶」の時間の地平をなすのは、不動の基準点として設定された絶対的な過去だ。社会の「長期記憶」としての「文化的記憶」は、その担い手である集団の特殊性と連続性の意識を依拠させることのできる、拘束的で規範的な過去についての知識を保持し、それを諸々の世代を貫いて伝達する。

「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」の区別は、アルヴァックスによる「記憶」と「伝統」の区別におおよそ対応している。<sup>19</sup> 上述のように、アルヴァックスは「生きた記憶」(mémoire vécue)と「歴史」(histoire)を区別した。そればかりでなく、彼はさらに「記憶」と「伝統」(tradition)を区別している。アルヴァックスにとって、「歴史」と「伝統」は、集合的記憶を固定する二つの異なった形式である。この場合、「歴史」が過去に関するデータの批判的な選別と(文字による)中立的な記録を意味するのに対して、「伝統」は具体的な生活連関から分離されて規範化された、確固たる伝承を意味している。

アルヴァックスの主たる関心は、個人の有機的な記憶を基盤として間主観的に生成する集合的記憶、すなわち「コミュニケーション的記憶」の分析に向けられていた。それに対してアスマン夫妻は、アルヴァックスの場合にはむしろ背景に退いていた「伝統」の問題、つまり、忘却に抗して過去と現在の連続性を打ち立て、集団の同一性を維持する文化装置としての、制度化された集合的記憶の分析に重点を移した。<sup>20</sup>

「伝統」は、伝承と受容という営為の自明性、そして過去と現在と未来の一貫した連続性を強調する一次元的な概念である。アスマン夫妻は、この「伝統」という概念に代えて「文化的記憶」の概念を用いることで、

連続性を打ち立てるといふ文化のプロジェクトに常に内在している、想起と忘却のダイナミズムを強調する。「文化的記憶」というコンセプトが着目するのは、諸々のメディアと文化的実践を媒介として過去を能動的かつ選択的に構築する文化のプロセスである。

### 「機能的記憶」と「蓄積的記憶」

想起と忘却が相補的に絡まり合う「文化的記憶」の動態を記述するために、アライダ・アスマンはさらに、「機能的記憶」(Funktionsgedächtnis)と「蓄積的記憶」(Speichergedächtnis)という二つの様態の区別を導入している。<sup>21</sup>この区別によって、「文化的記憶」の顕在的な次元ばかりでなく潜在的な次元にも、同一性の次元のみならず他者性、異質性、差異性の次元にも照明が当てられる。

「蓄積的記憶」とは「住まわれざる記憶」である。それは意味に関して中立的な要素からなる無定形の集塊だ。この記憶の様態は純然たる保存である。文化の「アーカイヴ」としての「蓄積的記憶」には、過去の諸時代の物質的な残滓の一部が、生きた連関とコンテクストを喪失したあとでも保たれている。それに対して「機能的記憶」とは「住まわれた記憶」である。この記憶は、文化のアーカイヴに価値の構造を与えて意味を産出する。この記憶の様態は、知識の選別と評価という「カノン化」の役割を担う。「機能的記憶」には、社会の選別のプロセスを通過した、集団のアイデンティティ形成にとって重要な知識が、顕在的な状態に保たれている。それらの要素は規範としての価値を帯びており、繰り返し活性化して習得するように義務を課す。

「蓄積的記憶」と「機能的記憶」の区別は存在論的なものではなく、パースペクティヴなものだ。その意味で両者の関係は、システム理論における「メディア」と「形式」の関係に相当する。何が「機能的記憶」に取り込まれ、何が「蓄積的記憶」に取り込まれるかを決定するのは、想起が行なわれるそのつどの現在の「社会的枠組み」である。両者は互いに条件づけ合っている。想起されたもの、顕在的なもの、意識的なもの、

わがものとされたものの領域である「機能的記憶」は、忘却されたもの、潜在的なもの、無意識的なもの、他なるものの領域である「蓄積的記憶」を背景として浮かび上がる前景だ。両者の境界は流動的である。現在の関心によって照らし出された過去の一部である「機能的記憶」からは、重要性を失った要素が「蓄積的記憶」に退く。しかしその一方で、「蓄積的記憶」の別の要素が、「機能的記憶」に再び取り込まれて顕在化される。あるいは別様に表現するなら、文化のアーカイヴに留められた過去の諸々の時代の痕跡は、前進する現在の意識に照射されて、「読解可能性」(ベンヤミン)の布置連関を繰り返して新たに結ぶ。

「文化的記憶」というコンセプトは、「過去と関係を取り結び、意味を産出するなどの形式も、不可避的にパースペクティブ化されていること、あるいはアイデンティティに関連づけられていることを出発点とすることで、歴史と記憶の区別を克服することを試みる」。<sup>22</sup>「文化的記憶」の理論の枠組みでは、「記憶」と「歴史」の対立は、「機能的記憶」と「蓄積的記憶」の区別によって置き換えらる。両者は、集合的な想起の相補い合う二つの様態として、相互に生産的な関係に置かれる。

滑らかに移行する階梯の一方の極には、「規範的な伝統」という意味での「記憶」があり、他方の極には、実証主義的、客観的、価値およびアイデンティティに関して中立的な「批判的歴史記述」という意味での「歴史」がある。この場合、「機能的記憶」の様態に分類される「記憶」は、歴史研究の相対化する傾向にあらがい、過去についての知識の集塊を現在との関連性に従って選別し、それに意味と方向を与える。その一方で、セカンド・オーダーの記憶である「蓄積的記憶」に分類される歴史研究は、特定の過去のヴァージョンを神話化する傾向にある「記憶」を相対化し、記憶の諸々の構築物を批判的に検証するためには欠かせない。アライダ・アスマンの言葉を借りるなら、歴史研究は、意味と価値付けを記憶に負っている。記憶は、その検証と訂正を歴史研究に負っている。<sup>23</sup>

本稿をまとめたい。「記憶」というコンセプトでは、何がではなくいかに、想起される過去ではなく、想起の行為が遂行される現在に関心が向けられる。つまり、文化学における記憶研究で問題となるのは、過去が実際にどうであったのか、あるいはどうあるべきかではなく、いかなる過去がそのつどの現在において、誰によって、どのように、そしてなぜ想起されるのか、誰の過去のバージョンが記録されて伝えられるのか、あるいは忘れられるのかである。本稿で扱った三つの理論的立場は、いずれも過去の表象と集合的アイデンティティの構築の連関に照明を当てるといって共通している。

「記憶」と「歴史」の対照というトポスとの関連で三者の相違点を挙げるとすれば、アルヴァックスはみずからの発見した「集合的記憶」という枠組みの呈する独自のダイナミズムを際立たせるために、これに、過去の客観的再現という実証主義的な意味に解された「歴史」を対置した。この「記憶」と「歴史」というアルヴァックスの図式は、ノラの場合には「記憶」あるいは「歴史」という二者択一の関係に先鋭化される。ノラはこの背反関係に歴史学の側から再帰的な視線を向けることで、「記憶」をみずからの領域に取り込むような新たな史学的方法を提示した。それに対して、アスマン夫妻の提起した「文化的記憶」のコンセプトでは、「記憶」と「歴史」は対立概念としてではなく、対概念として捉えられる。包括的な想起の文化において「歴史」は、ある社会がみずからの過去と再帰的・批判的な関係を取り結ぶための形式として、「社会的記憶」の一つの様態をなしている。

#### 註

- 1 Peter Burke: Geschichte als soziales Gedächtnis, in: Aleida Assmann/Dietrich Harth (Hg.): Mnemosyne. Formen und Funktionen der kulturellen Erinnerung, Frankfurt a. M. 1991, S.289–305, hier S.292.
- 2 Aleida Assmann: Gedächtnis als Leitbegriff der Kulturwissenschaften, in: Lutz Musner/Gotthard Wunberg (Hg.): Kulturwissenschaften. For-

- schung – Praxis – Positionen, Wien 2002, S.27–45.
- 3 Reinhart Koselleck: *Vergangene Zukunft. Zur Semantik geschichtlicher Zeiten*, Frankfurt a. M. 1979, S.50.
  - 4 Vgl. Friedrich Nietzsche: *Vom Nutzen und Nachtheil der Historie für das Leben*, in: Ders.: *Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe in 15 Bdn.*, Berlin/New York 1967ff, Bd.1, S.243 ff. ただしこの文脈でニーチェは「記憶」(Gedächtnis)という言葉をほとんど用いていない。ニーチェの語法では「歴史」を表しているのが想起であり、「記憶」を表しているのが忘却である。
  - 5 これに関しては次を参照。ソール・フリードランダー編『アウシュヴィッツと表象の限界』上村忠男・小沢弘明・岩崎稔訳、未来社、1994年。
  - 6 Maurice Halbwachs: *Das Gedächtnis und seine sozialen Bedingungen*, Frankfurt a.M. 1985 (1925), S.21.
  - 7 Ebd., S.390.
  - 8 M・アルヴァックス『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社、1989年、94頁。
  - 9 同93頁。
  - 10 同86頁。
  - 11 ここで付言するなら、アルヴァックスは社会学者として「経済社会史年報 (アナル)」誌の最初期の編集委員の一人だった。これに関しては次を参照。Patrick H. Hutton, *History as an Art of Memory*, Haver/London 1993, S.75 f.
  - 12 Pierre Nora: *Zwischen Geschichte und Gedächtnis*, Berlin 1990. この文献からの引用は、本文中に頁数を挙げて示す。(邦訳は、ピエール・ノラ「序論 記憶と歴史のはざまに」長井伸仁訳、ピエール・ノラ編『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史』第一巻所収、谷川稔監訳、岩波書店、2002年、29頁以下)
  - 13 同様にイェルシャルミは——ユダヤ教の想起の共同体という特殊なコンテキストにおいて——「記憶」と「歴史」を互いに排除し合うものとして、二者択一の関係に置いている。イェルシャルミによれば、聖書においてカノン化され、超時代的なものとして保たれてきた、生きた伝統という意味でのユダヤの集合的記憶の凋落と、19世紀以降に世俗化の過程で誕生したユダヤ歴史記述の興隆は軌を一にする。イェルシャルミによれば、批判的距離と客観性という歴史主義の諸価値に基づく現代の歴史記述は、かつてユダヤ教の集合的記憶が与えることのできた規範的でアイデンティティを基礎づける力を、もはや提供す

- ることができない。次を参照。ヨセフ・ハイム・イェルシャルミ『ユダヤ人の記憶、ユダヤ人の歴史』木村光二訳、晶文社、1996年。
- 14 ノラの網領的論文のこのような読み方は、雑誌『未来』に掲載された岩崎稔氏の諸論考「ピエール・ノラの『記憶の場所』1・2」（『未来』380号2頁以下、381号9頁以下）に多くの示唆を負っている。
- 15 ピエール・ノラ『『記憶の場』から『記憶の領域』へ——英語版序文』谷川稔訳、ピエール・ノラ編『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史』第一巻所収、谷川稔監訳、岩波書店、2002年、28頁。この『記憶の場』の「英語版序文」では、フランス語版の序論「記憶と歴史のはざまに」を特徴づけていた「歴史」と「記憶」を徹底的に対置する強い論調はみられない。むしろこのプロジェクトが、新たな史学的方法として、歴史学にもたらした成果が言祝がれている。
- 16 ジャック・ル・ゴフ『歴史と記憶』立川孝一訳、法政大学出版局、1999年、2頁参照。
- 17 Burke, a.a.O., S. 289.
- 18 Jan Assmann: Das kulturelle Gedächtnis. Schrift, Erinnerung und politische Identität in frühen Hochkulturen, 4.Aufl. München 2002 (1992), S.11.
- 19 Vgl. ebd., S.64.
- 20 のちにアルヴァックスは「集合的記憶」の概念を文化的伝承と伝統形成の領域へも拡張している。彼の著書『聖地における福音書の伝説トポグラフィー』（La Topographie légendaire des Évangiles en Terre Sainte, 1941）は、キリスト教の伝説が聖地のトポグラフィーに固定され、可視的な記憶の風景となって、コメモラシオンの伝統を形成していったプロセスを調べている。
- 21 Vgl. z.B. Aleida Assmann: Erinnerungsräume. Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses, 3.Aufl. München 2006 (1999), S.130 ff（邦訳、アライダ・アスマン『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳、水声社、2007年、158頁以下） sowie Dies.: Der lange Schatten der Vergangenheit. Erinnerungskultur und Geschichtspolitik, München 2006, S.54 ff.
- 22 Jan Assmann: »Gedächtnis«, in: Stefan Jordan (Hg.): Lexikon Geschichtswissenschaft. Hundert Grundbegriffe, Stuttgart 2002, S.100.
- 23 Vgl. A. Assmann, Der lange Schatten der Vergangenheit, S.51.